Osaka University Knowledge Archive

Title	装飾と透明 : 現代建築の外観デザインにおける透明性の表現をめぐって
Author(s)	川島, 洋一
Citation	デザイン理論. 2019, 73, p. 92-93
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71201
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

装飾と透明
── 現代建築の外観デザインにおける透明性の表現をめぐって ──

川島洋一　福井工業大学

透明性とデザイン

1998年の初代 iMac の発売は，中身が透けて見えることに理由のないコンピュータの躯体に「透明性」の表現が用いられたことにより，現代デザインにおける装飾の意味を象徴する出来事となった。本来は中身を隠したいはずの若い女性のバッグが透明になり，プロダクトデザインやパッケージデザインにおいても透明な表現が増えたのは，単なる偶然ではなく情報化時代の人間が求める感覚と関係があるに違いない。本研究は，建築やデザインの分野に現れた「透明性」を現代的な装飾表現の一種と仮定し，その表現の意味を考察する試みである。

透明性の表現手法の展開

建築の分野においてこの問題の嚆矢となったのは，建築史家コーリン・ロウの1963年の論文「透明性　実と虚」である。ロウが，近代建築の初期の作品を事例に，「実の透明性(Literal Transparency)」と「虚の透明性(Phenomenal Transparency)」の 2 種類の存在を指摘したのは，驚くほど卓見であった。これらの透明性の表現は，その後，近代建築の視覚的表現が多様化し複雑化する中でデザイン手法として完全に定着したのである。ガラスのカーテンウォールで建物全体が覆われたビルを，すでに私たちは斬新な建築とは思わないほど，透明性の造形表現は普及し進化してきた。たとえば，ガラスのような透過性を持つ材料による「実の透明性」については，フロストガラスやポリカーボネードなどの材料の性質を生かした透過表現の多様化が進んだ。1990年代後半からはルーバーの利用が徐々に流行し，開口部に限らず広く外装に多用されるケースも増えてきた。また，タブルスキン（複層化した外壁）と呼ばれる外装の手法が普及した。ガラスのカーテンウォールを二層化し，さらにルーバーの層を付加するなど，建築の外装表現が明らかに多層化の方向へ進んでいる。ガラスによるダブルスキンは二層とも透過性の高い素材を重ねる手法であり，元来は熱環境のコントロールを目的に生まれたものではあるが，造形的には典型的な「実の透明性」の表現である。ルーバーについても，そのすき間を視線が通り抜けることにより透過性が生まれるため「実の透明性」の一種である。この手法は，日本の伝統建築の窓における格子の系譜に属すると考えられるが，これら多層化した外装仕上げは，地球環境問題への対応のような現代性を反映する解釈を与えられて，現代建築における表現手法のヴァリエーションに加えられる機会が増えた。

一方，「虚の透明性」についても，ロウが指摘した単純で暗示的な表現にとどまらず，現代建築ではファサードの外側（表）から内側（奥）へ向かって幾層もの段階的な奥行きが示唆されるような，複層性のある透明表現の手法が開発されてきた。現代建築では，こうした「虚の透明性」に加え，上述した「実の透明性」の手法を複数組み合わせて，より複雑な透明性の表現が行われている。これら多層な外観デザインの構成において，設計者独自の造形表現を行うことが，先端的なデザイン手法の一つとなっていると考えられる。

実際の建築作品の分析

国際的に活躍する建築家の作品を分析して，このことを具体的に検証してみよう。たとえば，SANAA 設計の「金沢21世紀美術館」（2004年）では，最も外側に位置する平屋部分の屋根越しに，その奥に建ち上がる直方体の展示室のヴォリュームが見える。外側の平屋は大部分がガラス張りになっているが，室内が透けて見えるとはいえ，奥の展示室の輪郭まではっきりと見ることはできない。つまり奥に位置する直方体のヴォリュームの低層部分の存在は「虚の透明性」により暗示されている。「実の透明性」と「虚の透明性」の組み合わせにより，複数の奥行きの存在が認識される。次に，谷口吉生設計の「ニューヨーク近代美術館新館」（2004年）では，最も外側に位置するのはＬ型のフレームをなす壁の小口であり，その奥にガラスのカーテンウォールの展示室棟が見えるが，さらにそれより奥に位置するヴォリュームが上部にそびえ，より奥の建物の存在が暗示される。これら二例からは，複数の透明性の表現が組み合わされ，奥行き方向に複雑な位相を持つ構成が取られていることが看取される。外部から観察する者には表面のガラス面，またはその内部に見えるものへと，視線は位相の異なる複数の深さへと届く。さらに，その奥に位置することが暗示された位相の異なるヴォリュームへも意識が及ぶ。多数の作品を同様の方法で分析した結果，建築の外観を見る際に，これら位相の発生方法の違いが，作品ごとの外観デザインの手法の違いの一つといえることがわかった。すなわち，視線と意識とが到達する位相の深さが複数存在する表現が多数見られ，同じ建築の外観を見る際に，観察者が手前や奥に視線の深度を変えることが可能になる。これほど複雑な外観の造形操作を行う必要性が他に考えられないことから，これは透明性を利用したある種の装飾表現といえるのではないか？

本当に装飾は否定されたのか？

近代建築運動で，様式建築に由来する装飾が否定されて以来，近代建築においては装飾表現に関する言説が避けられてきた。近代建築の外観デザインと装飾性が無縁というのではなく，ポストモダンのような例外を除き，装飾性はあえて看過されてきたのである。

こうした問題を扱う上で，装飾の定義の議論を避けて通ることはできない。新潮社『世界美術事典』（1985）を参照すると，「（装飾とは）事物の表面を美しくよそおい飾ること。またその飾り」であり「装飾はそれ自体独立して存在するものではなく，常に付加されるものである」（引用者による抜粋）とある。さらに平凡社『現代デザイン事典』（2015）によると「（装飾の）機能としては造形物の形態を強調し，個別化するとともに，その意図を浮き立たせ，造形を完成させるもの」（引用者による抜粋）である。装飾が単なる付加物ではなく，それ自体に機能があるとする後者の指摘は，デザインにおける装飾の意味を考えるにあたり示唆に富む。本研究の文脈において考察するなら，建築に求められる一般的な機能性の他に，外観の造形が表現できるある種の機能があるならば，透明性を使った表現が果たす機能性とは何であろうか？　いまだ仮説の域を出ないが，情報化時代の人間が求める感覚と関係がある，というのが筆者の立場であり，本研究を進める上での問題意識である。

［付記］本発表は，藝術学関連学会連合「第12回公開シンポジウム」（2017年６月）での発表内容を前進させたものである。本研究は，福井工業大学川島研究室に所属した大学院生（太田竜平，三中一樹，中村正志）との共同研究の成果の一部を，川島が前進させたものである。